



# つのぶえだより

380号 2012. 5. 1

角笛幼稚園

年主題 あふれる愛

—小さきものとともに—

5月の聖句

神は愛です。

ヨハネの手紙一 4章 16節

今年度の歩みも一か月が過ぎようとしています。4月から入園されたお子さんたちにとって、いろいろな思いを抱えつつ幼稚園に通われている時期かと思います。

一人ひとりのお子さんが、入園する前、「早く幼稚園に行きたい」との思いの中で、子どもなりに思い描いていた幼稚園での生活というものがきっとあるでしょう。しかし、4月を迎え、実際に日々の幼稚園での生活に身を置いてみると、きっと入園前には思いが及ばなかったことに日々直面するようになるのだと思います。

幼稚園に来ると、今まで思い描いていた以上に楽しいことがある。でも、その一方で、ひと時であってもお母さんと離れなければならないことを知ります。毎日、幼稚園のお友だちと一緒に過ごすことの中で、初めて経験する多くの喜びがあるでしょう。しかし、お友だちとの生活の中で、自分の思い通りにはいかない、ということも多く経験することになるのだと思います。

もちろん、小さなお子さんたちにとって、毎日の生活が楽しいものとなることは、成長していく上で何よりもその基本にあるべきものだと思います。しかし、幼稚園の生活の中でも直面する、自分の思い通りにはいかない悲しみや葛藤というものも、きっと人間が成長していく上では欠かせないものでしょう。

「悲しみを知っている人でなければならない」。ある大先輩の牧師から聞いた言葉を、私は折に触れて思い起こします。他の人を思いやることができるためには、自らも悲しみや葛藤や不安を知っている人間でなければならない。もちろん、人の思いには、その人にしか分からないものがあることも確かでしょう。しかし、喜びであれ悲しみであれ、その思いそのものをつぶさに理解することはできなくても、その思いの「深さ」を理解し、思いやることができるためには、自らもまた喜びや悲しみを幾ばくかでも知る存在でなければならないのだということでしょう。

「神は愛です」。聖書がこのように語る神の愛は、悲しみと無縁な愛ではありません。この御言葉を語るヨハネの手紙一は、その神の愛の所在を次のように語ります。

「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」(4章9～10節)。

聖書は、神の独り子の十字架とそこに見えてくる神の愛を私たちに語りかけてやみません。私たち人間が真実に生きることを願ってくださる神の愛と喜びは、独り子をこの世に送り出す悲しみと深く交わっている。私たち人間に対する神さまの愛と悲しみが深く交わるところに独り子イエスさまの十字架は立っています。

神が、私たちに向けておられる思いの深さを思います。神さまの愛は、自ら深い悲しみを知っておられる方の愛です。神さまのその思いの深さを知りつくすことはできません。しかし、幼稚園で歩み始めた小さな子どもたちが抱く日々の悲しみや不安や葛藤をも、神さまは知ってくださる御方です。角笛幼稚園のお子さんたちの歩みが、神さまの深く大きな愛と顧みの中で日々豊かに育まれていきますように、祈っています。

園長 七條真明